

「心理的瑕疵物件のペット」

—修正稿—

2026/01/30

しのめ ののの

〈人物表〉

向田 英二

(27)

賃貸不動産屋の営業

湊 大介

(36)

向田の職場の店長

クロネ「不動産の店舗内（昼）」

賃貸物件を紹介する為の、ありふれた店舗。

向田英二（27）、硬い表情でPCに向かっている。

湊大介（36）、向井を一瞥し、威圧的な声を出す。

湊 「……てかさあ」

向田 「は、はいっ」

向田、緊張した様子で咄嗟に反応する。

湊 「幽霊って、結局なんだろう？」

向田 「え……？」

湊 「不動産業界的には何にあたるのか、定義する必要があるんじゃないかね？」

向田 「……心理的瑕疵、とかじゃなくて、ですか……？」

湊 「それだと広いじゃん。単なる事故物件もそうだし、近くにヤクザの事務所がある、とかも心理的瑕疵だからな」

向田 「えっと、じゃあ……」

向田、おろおろと答える。

向田 「ええと、物件に最初からついてるなら……設備とか……」

湊 「ええ？ 幽霊って設備なの？」

湊、ぷつと噴き出す。

湊 「お前、面白いこと言うな。他には？」

向田 「あ、あとは……前の住人が連れてきて置き去りにしちゃったなら、残置物？ とか……それか、ペットとか……」

湊 「何言ってるんだお前」

と、意地悪く笑う。

湊 「まあでも、置き去りにされたペットか……かわいそ」

湊、物件資料を向田に見せ、ニヤニヤ笑う。

湊 「確認しに行こっかあ」

向田 「ええ……幽霊物件ですか……？」

湊 「さあね。変な物音が聞こえるんだってよ。詳細載ってないんだよなこれが」

向田 「うわあ……」

湊 「え、なに？ 嫌とか言わないよねえ？」

向田 「自分、そういうの苦手で……」

湊 「しょうがないじゃん、問合せ入っちゃったんだから」

湊、ニヤつきながら向田の背中を叩く。

湊 「大丈夫だって、この時間だしさ。俺も行くからさあ」

向田 「うう……はい……」

2. 山のふもと・車道（昼）

住宅街から離れた田舎道を、クロネコ不動産の社用車が走っていく。

3. 空き家・外観（昼）

うっそうとしたボロい一軒家の前に、車が停まる。

山のふもとで孤立しており、付近に他の家はない。

向田が降り、険しい顔で空き家を見上げる。

湊が運転席から声を掛ける。

湊 「車停めてくるわ。先入ってるよ」

向田 「ええっ？ い、嫌ですよ……」

湊 「なっさけねえな」

湊、笑いながら車で去る。

向田、ため息を吐き、恐る恐る家の周りを確認する。

家の裏手は小さな丘のようになっており、好き放題に伸びた草木が侵食してきている。

向田 「幽霊以前に、虫もやばそう……」

向田、こわごわ外観の写真を撮ってみる。

すぐにデータを確認するが、異変はない。

向田、息を吐く。慎重に周囲を歩き回り、設備を確認したり、時折写真を撮ったりする。

しばらくして湊がやって来る。

湊 「ちゃんと外観撮ったか？」

向田 「はい、一応……」

湊 「じゃ、早速行きますか」

向田 「うう……はい……」

湊と向田、玄関へ向かう。

2階の小窓の奥で、一瞬何者かの影が動く。

4.

空き家・玄関内（昼）

湊、鍵を差し込んで玄関の扉を開ける。

中は雨戸などが完全に閉め切られており、昼間とは思えないほどの暗闇。

向田 「暗っ……」

湊 「ほーいどうぞっ」

湊、不意に向田の背中をドンと中へ押す。

向田 「うわあっ。や、やめてくださいよ……」

湊 「だってお前ビビリすぎなんだもん。はーおもしろ」

向田、玄関付近のブレーカーを探し当てて上げるも、電気が点かない。

向田 「うわ、切れてる……」

湊 「（軽く舌打ちをし）しゃーねーなー」

二人、スマホのライトを照らす。

湊 「ほら、さっさと進んでくれよ」

向田 「ええ、僕が前ですか……」

向田、湊に睨まれて仕方なく先に進む。

床が傷んでおり、歩みを進める度に不気味に軋む。

湊、玄関の戸を開けたまま、向田に続く。

不意に、傷んだ家屋からピシッとラップ音が鳴る。

向田 「わあっ」

湊 「っせーな。こんだけ痛んでんだから音くらい鳴るだろ」

廊下の先にリビングの扉があり、玄関からの光が届きにくい構造になっている。

向田 「いや暗いですってえ……」

5.

空き家・リビング（昼）

二人、リビングへ入る。

湊、リビングの窓に近づき、雨戸を開ける。

弱い日が差し込んでくる。

向田 「日当たり悪……」

湊 「写真撮れよ、写真」

向田 「えええ。流石に勘弁してください。写真は……」

湊 「はあ？ 外観は撮ったんだろ？」

向田 「それとこれとは別ですって、中は流石に……」

再び、どこからかメキツとラップ音が鳴る。

向田、怯えた声を上げる。

湊 「はあ……しゃーねえなあ。じゃあ写真は最後な。お前、2階見て来いよ。俺、水回り行くから」

向田 「ええ？ わざわざ分担しなくても……」

湊 「いい加減にしろよお前。仕事しに来てんだぞ」

と、音量を上げて向田を睨む。

向田 「すみません……」

と、半泣きで階段へ向かう。

6. 空き家・2階（昼）

向田、恐る恐る階段を上がって来る。

2階も真っ暗。

向田が雨戸を探そうと踏み出した時、何かが背後を這いずるような物音がする。

向田 「うえっ？」

向田、びくりと振り返る。

向田 「……なに？ 湊さーん？」

向田、声を張り上げる。

階下から威圧的な湊の声。

湊 「あ？ なんだよ」

向田 「なんでもないです……」

向田、しゅんとして雨戸を探す。

覗いた部屋が広めの和室になっており、雨戸が閉められている。

向田、近づこうとしたところで何かにつまずく。

向田 「痛っ」

向田、つまずいたものを確認する。

空の大きなアクリル製ケースが放置されている。

向田 「なんだよもう……」

向田、気を取り直してガラス窓を開ける。

続いて雨戸を開けた瞬間、何かが飛び掛かって来る。

向田 「うわあっ」

向田、思わず飛び退く。

よく見ると蛇が足元に落ちている。

向田 「え、蛇？ うわああっ」

蛇が突然機敏に動き、そのまま和室の押し入れへ。少し空いたふすまの隙間から、中へ入っていく。

向田、思わず勢いよく押し入れの戸を閉める。

向田 「……やばあ」

向田、恐る恐る押し入れに近づき、聞き耳を立てる。物音はしない。

向田 「やばあ……」

向田、急ぎ足で部屋を出て階段を下りる。

向田 「湊さん、湊さん」

湊の声 「なんだよ？」

向田 「幽霊って、やっぱりペットだったみたいです。いや、ペットってというか野生なんですけど……」

7. 空き家・リビング（昼）

向田、リビングに入る。

雨戸が閉まっており、真っ暗。

向田 「……え？ 湊さん？ もう雨戸閉めたんですか？」
返事がない。

向田、慌ててキッチンに向かう。

8. 空き家・キッチン（昼）

向田 「……湊さん？」

と、慌てて覗きに来るが誰も居ない。

9. 空き家・風呂場（昼）

向田、覗きに来るがやはり湊の姿はない。

向田 「え……？」

向田、突然弾かれたように玄関へ向かう。

10. 空き家・玄関（昼）

向田の向かう先、玄関の扉が閉まっている。

飛びついて開けようとするも、鍵が掛かっている。

向田 「え？　なんで？」

向田、慌ててガチャガチャと開けようとする。

向田 「湊さん、開けてくださいよ、湊さんっ」

その時、耳元でおどろおどろしい声が聞こえる。

謎の声 「ペットなんかじゃない」

向田、絶叫。

何とかして玄関の鍵を開け、脱出する。

11.

空き家付近の有料駐車場（昼）

向田が闇雲に走っていると、乗ってきた車を発見。

半狂乱で駆け寄ると、車内で湊が必死にドアを開けようとしている。

湊 「出してくれ、おい、出せよっ」

向田 「えっ？　何やってるんですか」

湊 「開かないんだよ、開けてくれよ、助けて」

向田 「い、いや……やめてくださいよそういうの」

向田、ついに湊を睨んで声を荒げる。

向田 「わぎとでしょ全部。僕に対する嫌がらせですよ」

湊 「はあ？　何言ってるんだよ。俺ずっとここにいて、出られなくて……」

と、湊、苦しげに悶絶し始める。

向田 「え？　湊さん？　湊さんっ」

向田、必死にドアを開けようとするも開かない。

湊 「へ、へび、へびが……」

湊、しばらく苦しみ、泡を吹いて崩れ落ちる。

向田 「うあ、うわああっ。だ、だれかあっ」

向田、その場から逃げるように走り去る。

車の下から、蛇が這い出てきて姿を消す。

12.

空き家・外観（昼）

向田の叫び声が響く中、何者かが2階和室の窓の内側から、ひっそりと雨戸を閉める。

おわり